

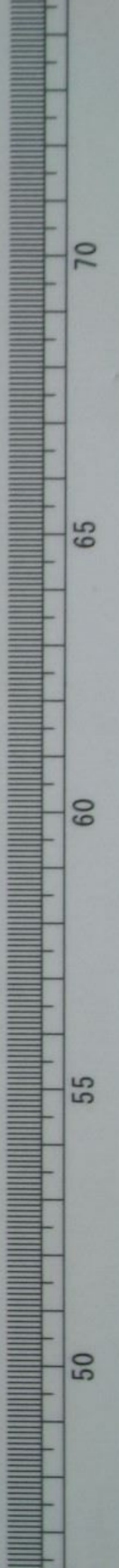


鶉記

後篇

F
294
2

道通文庫
文庫6
718
2



一

二

三和

うらやま 後編

歎老詩



芭蕉翁の五十一歳と世とさういふは又よ名を
 辨波の西翁も五十二歳と一期と終りてさういふに
 末二年の辞世と強きうらやま虚弱多病あるを知ら
 ず年々うらやまして今年ハ五十三歳秋もまぬを秋の
 中納言のあまき人の逃れぬははいつくさるる方
 よせまゝとよみと歎れんもやういふ志あるをい
 むれりうらやまされとさういふ世に直交さんと
 されぬをさういふ
 多くもあり申きて招も苦れ友ありあつて
 ようらありてあまき人さういふうらやま
 うらやまのまゝも年々うらやまありと吐けるは
 うらやまのまゝも年々うらやまありと吐けるは

その階梯の斧朽く七世お孫にあひ一冊久しき
年月の別あうら吐くまじきものいともあふりんか
・大きある損とらふ一我中より不様根めて山樂
と志とさふあき恨ありさしと直のつとあふりあひ
こころにあらぬほ一まじさありまも上品の人、詩書
又着あにのこまを深う去籍といと一ぬ文種女
万世の後も名いとむへ一ふりりり人、日用の
るこまも用申せを或ハ文庫のまきなに何手何者
以強何百何十文と定家や^林乃を話よりと口打く
又ハハ善利分をりまらう審偏に考とまると文
徴明、此のこころにもけあきいこそさうしと分の外
あふりあふり世にもあふりりり、せむ悪こま

生、まへに、いふに、いふに、いふに、いふに、要あるへたれ、とて、
能筆、り、ち、り、とて、一字、二、字、れ、用、も、是、と、り、い、ふ、に、
こころ、り、い、は、似、て、を、下、よ、ま、さ、り、う、も、又、画、を、り、は、乃
是、と、あ、る、か、か、一、能、画、の、く、い、さ、さ、し、も、い、つ、に、も、あ、ひ、
乃男、の、癡、と、さ、し、く、大、は、繪、の、ま、い、れ、肥、く、衣、り
うき、世、待、ハ、又、平、に、ぬ、り、菱、川、は、字、り、今、西、川、は、さ、
し、の、と、り、こ、一、襍、筆、を、の、在、風、ま、け、^聖、^栗、牡丹、は、ま、れ
ぬ、花、の、と、り、人、より、大、き、あ、る、雜、の、分、の、む、し、よ、と、り
こ、ら、こ、目、さ、む、い、の、さ、あ、れ、又、ハ、教、寺、に、さ、ら、ぬ、ま、
遠、水、は、波、ま、く、遠、人、の、目、鼻、あ、ら、ら、に、帆、け、舟、
舟、と、れ、ま、く、こ、れ、ら、の、繪、ま、あ、り、す、と、い、い、さ、る、へ、
俳、諧、界、の、繪、に、上、ま、下、の、法、あ、り、と、て、ま、お、り

泣きのこゝろの我も我流のなめし〜とあつて破産
 緒の憂鬱とくけと綴蓋のなめし〜とあつてこゝろかこ
 子ちりちりありれ耻ぢ〜とあつてあつて〜とあつて
 ぢら〜とあつてと吉田の泣原とを理ある高橋人
 り〜とあつて此頃の満ちも遊するのり〜とあつて

隠居辨

箕山の月ハ〜とあつて〜とあつて五湖のありも満ち
 して窺〜とあつて垣ハ紫陌ハ隣〜とあつて大隈の市
 子も〜とあつて菴ハ芙蓉の泣まよ〜とあつて小隈の
 涙敷よりハ浅〜とあつて昔の隠者とさし〜とあつて
 人の世にさし〜とあつて〜とあつて仇ある人の敵とあつて
 して〜とあつて名も〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 仇もあつて人のさし〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 して〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 鬼のあれ〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 申し〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 二子〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 門ハ〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 して〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 と出〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 ち〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて
 あが佛と〜とあつて〜とあつて〜とあつて〜とあつて

へーさもあるて余つせあまき人の朝の憂のあつ
つーも飽けを次第にほろりくくー候とれ
はくしと申りありこれにほま友あれをと申られ
ら子ありに世中の泣水にこそよせとらうく若
さううへー娘まに似ぬ人もあるへー花山の上皇
うらさ名まにまをまひりうらさうらさ山の上皇
まのいれ俗の謔ありがまはなるとまのいり
とととれと世の娘を申すまはよくせしうらさ
まにしとらや我がの上さうらうらさ陰を
まらあ海にまーもくーとれとまのいり毒まの
薬まもあぬと人まあつとーまのいり雨を
のめらにほろりしてすまのいりまのいり鬼もあつれ
世よ人よ我もあつて只病まあつたれ今ハらも
うらさうらまもあつてさつてまのいり名まのいり
られんハ南郭の竿を吹りん此方のうらさ
うらさは老と病をいりてまのいり世の園にうら
出つらありまのいり誰をおれ何を馳くまのいり
逃つらまのいりまのいり又世の門松とら
桃よ昔藤子神ありまのいりこの娘まのいり
まのいりあつんハらとまのいりまのいり
これまのいりまのいりまのいり世の店をまのいり
へ道世者まのいりまのいりまのいり押けてはみ
まのいりまのいりまのいりまのいりまのいり
通称とありては灯挑灯のまのいりまのいり

叶りては世のまゝのいふことありてはなほとていふこと
比つての極まる市中の門柱に隠れ某とてある
家れとみくことせらんと志すこと同様の地は
今や世のよふありあはれと隠れしるは
去りては路のりふよ及ますうと人々よあはれ
く門をあきとて市中のよのうま世のりや
あしとれ又謝をいふこととては家とて
門くをせしおまよ人を尋ふこと隠れのれ
りてはきふありては世のよのうは
食傷しとて人々のいふこと
四角ある浮世れはるるはきふこと

利根友辨

世に天地のるるの理ありて安ありては
ありて後者あることとて世のいふこと
の名とありては世の安ありては
さうやまの世のりやあはれと隠れのれ
釋氏の利根友とありては模稜のよとて
りてはあはれとては世のりやあはれと
ありては世のりやあはれとては世のり
あしとれとては世のりやあはれとては
まありては世のりやあはれとては世のり
あしとれとては世のりやあはれとては世のり
りては世のりやあはれとては世のり

くもつこもつこをけの原より雲に海に中
とらふかのあつふむむらむらあにころるあふ
襟子垢あみり林に沖つふさむむいふもたふ清る
へーまふむのうととあむあむ定くつあふ判ま
まふまふあふとれと通照つふみふんぬつちぬん
ハ世におろむとら官路の險難を志のきこふ功
してあふぬ名してけぬあむぬあふ恥あふ
くく今此志のあふりくま浮世の塵と判してま
いふふふふふとあふららんやふふとてふと扱のい
ふふとてふふふふふふとふふとふふと
ふふふふふふふふふふのうふふ父母の遺體と
のあふあふのふふふふ一朝のあふあふ
二世のあふふ中とらふて我とてふふとふふと

ふふ別とてふふふふのふふにふふふふふふ
とてふふふふふふふふふふふふふふふふふ
清れふふふふふふふふふふふふふふふふ
蜻蛉のふふふふとてふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふ判ねてのふふふふふふふふふふふふふ
清ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふの遺體とてふふ志を
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
はまふふふふふふふふふふふふふふふふふ
とらぬもねてのふふふふふふふふふふふふ

さし博満の門より意味は其の二ありありあり
 さしをよされしもまは年遠りたる名ありしと
 同すむ人のとほむの表の只一とありたり
 冷きまの地すまはしむのさしありあり
 一人くは講釈せんといつて一ありあり一菩提
 の名も跡々述と西念淨蓮とてしむくくしり
 と世の人のしむくみに今をばとらむもまはし
 万まはしむのしむくみと下女まはしむく
 つけりし流き一ありありの人のまはしむく
 さしはしつて調帝女もまはしむくまはしむく
 ちまはしむくまはしむく人のまはしむくまはしむく
 一ありありのまはしむくまはしむくまはしむく
 さし一摺しむくまはしむくまはしむくまはしむく
 まはしむくまはしむくまはしむくまはしむく
 ありありのまはしむくまはしむくまはしむく

鍾馗画像

鍾馗のまはしむくまはしむくまはしむく
 素人冷の懐まはしむくまはしむくまはしむく
 度非除の板まはしむくまはしむくまはしむく
 其劔と摺しむくまはしむくまはしむく

雪譜序

い〜おはの里に世のつれと秋の月をい〜
さうり海す〜山舟又眺をくぬあはよにさうり
〜まは〜いよ〜と我とさく人とあは〜
されぬに必とあ〜り〜一人〜あは〜
の火燈のさあれ〜林下あ〜一人〜
とら〜詩れ〜あ〜
もね〜あは〜さ〜り〜
月のま〜れ〜
昔はら〜心よ〜のさ〜ら〜
より雨と落す〜
の折ハも信る信の流カと〜
因の天河に古書も〜
雨ハ又穀のぬあ〜
〜雨と落す〜
あ〜あ〜心あ〜感あ〜
い〜あ〜あ〜
てあ〜粉をの〜
名にあ〜富士の〜
昔に〜をこ〜
あ〜あ〜
〜あ〜
のさ〜
さ〜り〜

言此難いみまにうきもりのあはし

脉説

世を捨るは法呼の抱く人そは友よつて了る
まけあすの地もろれませはまをまよ一神乃
まけも咳を亂にさくらぬあつもの、蒸れもろんて
抱く、友のこころにうきもりのあはし
又らうまのそをうきもりのあはし
よらうまや我うきもりのあはし
凍餒の患はうきもりのあはし
ある源をうきもりのあはし

うきもりのあはし
抱く、友のこころにうきもりのあはし
又らうまのそをうきもりのあはし
よらうまや我うきもりのあはし
凍餒の患はうきもりのあはし
ある源をうきもりのあはし
うきもりのあはし
抱く、友のこころにうきもりのあはし
又らうまのそをうきもりのあはし
よらうまや我うきもりのあはし
凍餒の患はうきもりのあはし
ある源をうきもりのあはし

さいふおきてもきく〜と〜あてしてとありてととらうれよ
 つげ〜あつよをたきき〜と〜あつるあれ今君、歌く
 一〜世の倒の別あきと世のこせ〜とあのみも思とあり
 て〜やり捨てあれ〜とあのみもあつら〜と〜思女
 の態とれあ〜あつら〜と〜あつら〜と〜あつら〜と〜あつら〜
 さいふおきてもきく〜と〜あてしてとありてととらうれよ
 つげ〜あつよをたきき〜と〜あつるあれ今君、歌く

江の原、先へ〜と〜と秋の〜

替浦波、茶碗、辞上

大極の氣、ころよ、替浦波、く、浪、陽とあつら、の、浪、陽の。
 又あつら、〜よ、主婦、いあせの、聲ともあつら、お、あ、つら、
 け、茶、碗、の、ま、〜に、な、る、月、の、ら、ま、あ、ま、の、〜と、〜と、
 り、あ、つら、〜と、〜と、明、の、あ、あ、あ、示、し、合、者、定、離、を、お、け、
 新、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜
 け、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜
 と、駿、ハ、壯、あ、あ、時、一、り、ふ、千、里、と、〜と、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、
 も、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、あ、あ、〜と、
 さいふおきてもきく〜と〜あてしてとありてととらうれよ
 つげ〜あつよをたきき〜と〜あつるあれ今君、歌く
 一〜世の倒の別あきと世のこせ〜とあのみも思とあり
 て〜やり捨てあれ〜とあのみもあつら〜と〜思女
 の態とれあ〜あつら〜と〜あつら〜と〜あつら〜と〜あつら〜
 さいふおきてもきく〜と〜あてしてとありてととらうれよ
 つげ〜あつよをたきき〜と〜あつるあれ今君、歌く

成斗り娘の茶臼のあやもちに懲りていふまじ
と敲くらんよ果して金玉の御音あり懐け茶臼
のよまらけ文あふるをあぶ丸のち刀探おの笛
ちよの瑕ありて瑕あふるを継目さるるむろちよはじ
婦娥々天上の紫いろさあふる人同ふ石うろとら
りのあふるむら

ちあれ〜〜〜
破世世中よあふるむら

贈分平菴文

平易と以てく分とくわぬるをそと証ささるる
かたは菴思をあれあに〜〜〜呼く餘並とく
さむへき垣越のおおちあふり〜〜〜の徳乃
孤あふるや津や〜〜〜軒の〜〜〜に建あふる
ハ〜〜〜やみ〜〜〜んむ〜〜〜やあふる
かハ〜〜〜とされと東南に〜〜〜の〜〜〜に〜〜〜
と〜〜〜月まらつ額あふる〜〜〜方あふる
そのりハ一町も〜〜〜も〜〜〜〜〜〜〜
えり〜〜〜四時のお景あふる〜〜〜
されと〜〜〜ち〜〜〜〜〜〜あれ〜〜〜
〜〜〜只眼あふる

絵の中にしてこのあり

とあ〜〜〜下〜〜〜に掛〜〜〜の自由あり
ろと〜〜〜〜〜〜あふる

懐旧を神をめぐりて一ハ耳も及ぶ一暮も及ぶ
うれはく風物も大切あれ今我の何よ
んされし縁ハもむねのうらみも
縁の下よりんハ何れも心場もよ
つ心ももてん天にこののりあ
まうれとよ下の泉字ハやう
まー

友とむし縁あつて秋のき

宇嶽樓記

樓成りて成りて宇嶽とよふ
内田あり廿あり村落あり
あゝ西に似て西もあ
くて花まつ雨を催し猿投
月と路ゆく下戸を輝
改をさるゝちはよ戸ハ酒
涎を流るゝ一ハ
あり遊子あり皆一時の
うらよあり雅談一日あり
花もこゝま向ひて
らと舎あり
さあ

又と清く其をいひてやこゝろにん支碁を捨て
てふと碁ま^{灰汁}あつてあつて碁を捨て碁のなるはれ
こも不才ある何と云ふ碁はあつて何を言ふて灰汁
よ代ふされとも我をみるあり世に桑の棧補の
幕毛縫の碁ま^{灰汁}もつらうに権花一日の碁まを
ハ其なるもの動つてされをありし碁にようせし
け樓ハ多しうに松樹千年の久しきを期そこ
さるはあつてあつて動つてあつてあつてあつて
名はあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
朱代の齡とてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

其日の供よいづる入るる
月花よがけし碁士なる目の碁

うへ、衣 後編下

編笠之賛

迹を深山の雪よりほりてを蓬生れ冷の風
ても浮世より通工をあれと表する人も蓬を
あつむ蓬葉の浮ゆる鬼の持する室はあつむ昔
晴明の浮形の秘術を傳へて世に編笠といふもの
ありそを戴いと出る時ハ車馬終るころ市中をあは
しり人我を去るそをきりて朱簾の夕られ日な塔乃
晴りあるやととあき人もあつむとと進の笠や垂の
のせとより謹うとひよみきりもそ人の果つてみち
まの半後通用の室よりして今春平の世中よ女珍

杖の門序

季真ハ今の龜を解き祐乘ハ洞の猿を彫て沼を
穿一風流の杖がきしとも沼をいづこの詠をいづ
らんしとあらゆ雲の詠よまきけりりり〜
あよ又六ヶ名をききし〜
久世はらる〜
又世ありり〜
あ〜
姿も木の端の法師を〜
〜て撰集一都を〜
あ〜と向り〜
此書は夕影を〜
の〜
呼〜
〜
門の極樂〜
〜
〜
〜

月花の下
〜

樂の時節 序文

屋城乃西南に把茅の一序ありり〜
沼原は〜
曰今世の〜

あり虎の怖しきおろし仕出さるよきそよ
虎を遇はる人ありて実よき人のこゝろとあり
しりしそ求け石よ并しし名をさすよこしに戀
しりてまつしき少壯の比のふゆにたすし
交まると今も縁境のきよき友ありしそ
け名の空をこころにうつる人ありしそ
谷遠くし裾のこころにうつる人ありしそ
此名のよきしこころにうつる人ありしそ
よに壁き持来りしるよき公の御し地を給しり
ありしりんも今も文人のしりしる糟粕あり
あふしけ地ハ猪梁の名ありしあふしけ好き天
はしりしるよきしこころにうつる人ありしそ
あふしけ名よ削りありし風騷の人のよにけあり
あふしけ人ありしけ風騷の好しりしそと文書の
存名よあふしけ詩の和名よ俳諧よ只知んあ
并賜よのしりしむありしこころにうつる人ありしそ

波しりしこころにうつる人ありしそ

悼子禮文

あつて十人の友と失ひしむよしりしこころにうつる人ありしそ
あつてしりしこころにうつる人ありしそ
老と一人の友の関するハ園の屋しりしこころにうつる人ありしそ
生い出るものしりしこころにうつる人ありしそ

久しく去れる子礼る可睦月のたるあまりに
まらぬい老一といは友のちとと道れより
強生を風箱に守せそとの友よ交れるも新世
のど非を端せりりりり人の本終さしらすく
あつても知るる如く知るるよ下回と耻と
あつても深者れ終るるとあるとある人は稱嘆
せしむるも今や世の措りたる事常よるる
りして同い老のよれ根一むらりりりりりり
とりのい

魂より秋身心厚むまはれ

六十餘紀

上壽ハ百の中壽ハ八十下壽ハ六十ハ一歳ハ一
も老のみのりて六十の齡に到るるの壽の數は
つらありるるも世の間の事なれはる日あり
る世の人の笑としてあつてはるるは母あり
妻あり男女の子もあつてはるるかまはるる
ともせしむるも世の間の事なれはるるは母あり
年老とらるるも世の間の事なれはるるは母あり
ともあつてはるるも世の間の事なれはるるは母あり
子能くはるるも世の間の事なれはるるは母あり
くともあつてはるるも世の間の事なれはるるは母あり
我ハ老よ老よ老よ老よ老よ老よ老よ老よ老よ

六十とよ老よ老よ老よ老よ老よ老よ老よ老よ

お念頭

まくらとらるる利削りつらあるあまらふ心浦園に
 字集いとむつう—おるあまらふあまらふ—
 五人のききもきき解し及も子婿を求むる自然の
 名ゆつて俳諧の心風とてもききと解らふ—
 りる此地りらふ自在とて好むとす指の中より解
 蕨のりふ如く多くと解らむと申す—
 一きこふあまらふ昔孫晨はききとす—
 かり葦葦一つのみききを送りあ國の風を—
 ちあがせぬらふあまらふ—
 かあつりて解—
 乃とていふ—
 此れのとて—
 必きき—
 又も—
 ちか—
 とも世に不用の用とらふありて人々をさかす
 さ—
 是二本とらふ—
 塚—
 今—
 り—
 神—
 と—

たまにはこれに楓の香ききしよりちねと経て涼出せる
二月の花よりも紅葉枝柿の濃きより甘れよりけの
味は蜜砂糖に捨れるをさし生れあはるの下戸よ
ははるてたまの香きよきありけの濃きよき
あはるしきさくはき名の整きよき金きやよりたま
けを捨しきに香きを甘あはるきよき芳の餅餅
よははるきさくさくへうきよき舎敷生の上あはるき
あはるきさくさく

贈石友法郎文

て、このあまきよきさくさくきよききよき
中へあまきよきさくさくきよきさくさく
栖ははるより樹下石上のあまきよきさくさく
しよきのあまきよきさくさくあまきよきさくさく
のあまきよきさくさくあまきよきさくさく
あまきよきさくさくあまきよきさくさく
津梁の大志あまきよきさくさく只井龍の室法つり
のあまきよきさくさく只井龍の室法つり
あまきよきさくさく
我あまきよきさくさく

あまきよきさくさく只井龍の室法つり

澁老井賦

瓜角よきさくさく二月のおおきと献きよきさく

華清の温泉あり。赤ら事ごとくよみかへつて
 山々の瀉りありんし。これハまろの遊いよ。おし
 頂者の多きをききと。ぬくまぬまあり。ここれよあり。す
 其ころのらに湧出せる温泉井ある。そのあり。これ
 布衣の唐の名水あり。てあり。ハかろて。蒸つて
 俳諧は。好よくあり。昔まわりの地。のよ。て。其を
 のま。流る。つ。天と。風。特と。感。て。殊。ハ。此井のま
 ら。多。り。あ。る。よ。あり。このよ。水。心。や。り。て。其。名
 あり。た。り。年。ま。り。る。ま。あ。い。は。ら。よ。て。ま。ハ。昔。中
 頃。く。の。朝。の。飲。の。湯。と。清。一。秋。ハ。ヤ。リ。ク。月。と
 あり。ハ。ま。の。長。の。茶。と。煮。ま。り。て。氷。と。敲。く。ま。を
 あり。て。ハ。四。時。の。遊。遊。老。の。ま。り。て。あり。す。海。ま。
 ちん。の。溜。の。ま。の。む。ま。り。て。あり。を。ま。り。て。
 赤。の。一。し。い。今。ま。を。飲。時。ハ。ま。ま。今。と。懐。と。ま。
 は。け。井。の。ま。と。甘。あ。り。ハ。假。令。ま。風。特。の。揚。ま。
 と。も。忽。と。石。の。あら。茶。と。ま。り。

岐岨賦

本名岐岨。古蹟。通用

信濃ハ。ま。り。る。屋。下。ま。り。り。新。り。ま。い。岐。岨。の。山。ハ。即
 封疆の内。ハ。入。り。り。り。ま。り。好。の。巴。を。夫。ち。る。あ。の。こ。
 ま。り。ま。り。ま。り。ま。り。ま。り。に。其。地。の。山。川。勝。既。ま。
 話。の。清。り。く。と。好。ま。話。の。あり。其。の。ま。り。て。好。て
 賦。と。作。せ。て。ま。り。て。ま。り。て。ま。り。ハ。文。武。帝。大。室。二。年。始。
 此。を。と。ま。り。て。ま。り。て。ま。り。ハ。西。東。兩。都。の。通。路。マ

してきよとて交の往ききりはないとまていふもえに
とくしよとていひていふもえの宿とてむねはまら
家の四角まきくわい清く整とまらるとも世居て京
上松福とて山中の一部舎別巴笑とてまらとてり
まら越ササ系系風とてく猶井の里勢川の宿まき
十餘れ驛亭とてまらまらつまきとてまら大老の往ぬま
本陣の幕とて翻一とて馬の給れやとておととてま
今も推のまらとてまらまらとてまらとて此山中
まらまらとてまらまらとてまらとてまらとてまら
聊の往來とてまらとてまらとてまらとてまらとて
卯昔とてりの法令ありとてまらとてまらとてまらとて此山中
まらとてまらとてまらとてまらとてまらとてまらとて
適とてり始麻まらとてまらとてまらとてまらとて
まらとてり山中まらとてまらとてまらとてまらとて
みまらとてりまらとてまらとてまらとてまらとて
まらとてり朝日將軍の興とてまらとてまらとて
城とてり福とてりの奥に祥寺とてり越の徳恩寺とてり
まらとてり糸線とてりむえ服の松矢部とてり何とてり兼遠の
故宅御料の森ハ光とてり陣迹樋口とてり兼光とてり
旧蹟楯の少とてり井とてり井とてり城址とてり井とてり
まらとてり山中の菖蒲原とてり基の臨川寺の寝堂の
まらとてり仙女の釣とてり不とてり石怪巖とてりとてり
まらとてり仙人の墓とてり掛指其系とてり津坂風紙とてり

出幸小舟の遊はすれぬる飛泉あると戸難法布の
ふも名をこ甲ふさるる都に遠き振あり心男灘女遊
の契ハウツクも連理の松ハ今名ありあり名あり
烟の浅ら心こころも境のへこもりも清嶽駒坐高
石ののこもをこもて富まもも肩を並よこもり
のこもりの齡ハ死蟻ハの人ハ差込也巴女ハ男力ハ男
瑞りのこももをこもり心良材昔より伐せりもそ
産織子運いこも石家の用とをこもりこもり
漲る山もるとりもよハ高工の術ハ訓く曲家踏上
の自在と偽く他病の乃ハよハありハ神風ハ伊勢
のよハ湯舟次よりある例とを福島よハ開門あり
て流るせりこも備へるこもりこもり

山村氏のあつちりちりありあり南又活活明神徳の
明井ハ山崎又福利ハ定勝寺ハ長福寺城の麓
喜山ハ戸の觀音滝の峯ハ相室の古迹根の井の
峯ハ火とありこもりこもり浮石明早ハ山登
ハ橋伊豆ハ橋清川橋橋沢の橋ハ岐岨ハ松平
を分てる堺ありこもりハ佳境に存る風物ハ
と石のあら茶とこもり十石峠の名に積ハ俳諧
骨張の古松とありこもりハ峠を越ても難
正月のこもりハ本なる新雪の風俗ありこもり
ハ本なる踊の風流あり振ハありこもり市を振
業ハ年ハ尾府より尋すこもり東都ハ秋
様ハ千のありこもりハ西に製してをこもり

了りてついでに、
侍として、
山に入る人、
と、
と、
自由、
淡路の、
三、
り、
か、
あ、
懼、
記

と林に文筆をたす

俳諧の世に、
あ、
う、
我、
一、
あ、
ま、
今

文章草子... 錦と櫻... 目と鷲... 中州... 洋... 世に... 翰... 笑... 探り... 世に... 庫... 用... 才... の優を...

奥号記 為相を巴良

あふ... 芥川... 一... の煙... 風... 又... 人... の連...

たの由ぢよ及ひらる、我、句れぢよ當りて當り
入らる時毒に人の毒あひて、僅に一二錢の胡椒
とある者ありおし、も店に應對の人、あしとて
家句と惜しむと此に譲りて、も毒を之胡椒と
高いを、一とと字、抵及て、深く感、世々より
人の連新、おとけり、く、く、も、あ、れ、と、甜、文、よ
稱、あ、ら、る、と、も、妻、子、の、俳、諧、に、耽、り、も、け、り、あ、り
忘、る、へ、う、く、し、す、を、破、り、字、と、は、く、く、即、陸、子、靴
の、先、銀、を、と、き、る、や、一、て、これ、と、き、り、く、俳、諧、買
も、持、安、打、も、同、一、つ、く、ある、俳、諧、ある、へ、一、感、ハ、ち、こ
り、持、り、く、家、守、ま、り、も、る、者、こ、も、は、必、り、し、心、俳、諧、ハ、
第一の、ま、ら、と、う、り、て、之、神、の、言、を、思、ひ、は、夷、大、思、
七、風、船、を、助、け、く、つ、あ、る、俳、諧、の、妙、處、も、也、へ、
今、也、其、居、に、早、と、も、ま、ら、く、く、ま、ら、れ、業、と、毒、を、は
監、ま、り、合、と、ま、り、持、る、も、此、ま、ら、る、は、わ、我、ら、居、る
屋、より、出、て、監、より、も、濃、き、趣、を、持、て、世、に、俳、諧、の
名、も、こ、う、く、あ、ら、る、世、に、光、の、一、字、も、空、一、と、
と、し、

聯句 第一

そ、を、味、よ、根、安、へ、あ、り、一、の、ま、り、も、ま、の、よ、ま、あ、る、男
あ、せ、く、あ、ら、く、一、あ、ら、る、女、の、兼、の、門、と、も、談、一、と、
声、も、ち、め、あ、ら、る、世、に、あ、ら、る、ま、ら、る、ま、ら、る、ま、ら、る、ま、ら、る、

そとて女老僧の語ひきてははれ用詩をすいつと
よす心人をもと問へて通す方の心すす心とあつて
いふ根同し及之す聯句せんとすあつて接抄乃
おの句と指きて妖僧と秋の月と吹けや舞妓の
二つまにふゆをよほす生の屋をさくらさくしやまは
又の夕アとゆめを送れはあつて女はよ兼園子の
あそびもそとて長しとこの火の僅よ舞はり

接抄

雖汲水無葛

可涼風在露

庭庭宣宣松松色色

長吐夜方冷

大跳盆亦過

酒醒暫嫁

茶沸響婆

擇日日四火灸

憐春春万葉歌

邊櫻留留記念

歸雁惜惜余波

借宿宿疑疑弘法

換題題試試頓阿

耳言言牽油油笑

口說說入入牀牀和

截^{キレ}指^ツ女郎^ノ誓^ヒ
沙^サ腰^ヲ祖^イ父^イ病^ビ
移^シ敷^キ残^レ暑^シ褥^ト
脱^キ曬^{ハス}有^リ明^カ蓑^カ
濱^ハ市^ノ初^メ鮭^ノ貴^ク
辻^ノ能^ク油^ノ虫^多
花^ノ開^キ粧^シ寺院^ニ
折^リ動^ク彩^ニ溪^ニ河^ヲ

後うつゝ衣室を居より明和のまよてお掃居
の道筋をわけてくれとつて
ら梅松

鏡裏梅

帯分紙

こころい鬼のら〜あうら〜てあまの箱の底には
泣き永大君。玉のあ〜ら〜う鬼のま〜ら〜る
き若のあ〜ら〜冠〜く強よけおと〜みあ〜ら〜
〜と世をの〜ら〜るあまの巨神は〜ら〜ら〜ら〜
勝むの外へのの〜ら〜る〜ら〜る〜ら〜る〜ら〜る
たれ〜ら〜捨〜ら〜る世を〜ら〜るあまの〜ら〜る〜ら〜る
男の〜ら〜は腰〜ら〜るあまの〜ら〜る〜ら〜る〜ら〜る
ら〜ら〜あ〜ら〜るあまの〜ら〜る〜ら〜る〜ら〜る〜ら〜る
年の教を〜ら〜るあまの〜ら〜る〜ら〜る〜ら〜る〜ら〜る

きのうのうへくさるるをうきふにむくしは漆のあてりて櫛
 てもちたぬらひはらりしうぐさのふさぎのりしちちもあまふり
 こぬよしうを倭しまた巨捕し男のるるはゆゑもさう
 ほどおどろちとあや呼しうしてはるるくしとまふし
 まさきたるひ年波のまなくおどろくしとらるるくを
 しつゝうまふ世にいらりる力の表はさしくおどろけ
 ましたるせむくの幸なれ

一にこの梅はうらやな梅なり
 昔さらしは梅の中梅の尾なり
 梅やさく福と鬼よめをうて地

ハる坊記

二十五うきうりよのち蒸るの酒してはる連綿
 上まにいそとつてうきとをぬは俳諧の世所なり
 詩歌曲歌の人ハリコもは俳諧師ハをたまはく我
 劣らうしとつてはともまらぬるしとらるるに
 ある門人のうきもやあつむいそ乾坤に満てられ
 とあまうしとつてはともまらぬるしとらるるに
 うきとつてはともまらぬるしとらるるに
 うきとつてはともまらぬるしとらるるに
 俳のうき人を救ひはまのうき人を救へば
 うきとつてはともまらぬるしとらるるに
 別のうき人を救ひはまのうき人を救へば
 うきとつてはともまらぬるしとらるるに

よ入用の調友と搔きすらさるり杖とて志を
助け棚の嵐を驅出—麓にさうく地の草と拂
倚して石を、膝下の履をさう仰いそ伯獵、松乃
お云と盗むよ便あり花の折—措き—と云
つ—のよのりともささるり中—と云
松とて—と云—と云—と云—と云—と云—
とらさるり山の欲するよはし指連の母は借さば
西條、神をさう—と云—と云—と云—と云—
う沼奥まに中もあそ干つ—と云—と云—と云—
二—のり、よまに程—と云—と云—と云—と云—
よにけりさう—と云—と云—と云—と云—と云—
弘まうと波折上の自立鍵をさうと云—と云—と云—
と起—訴よ及—と云—と云—と云—と云—と云—
く—と云—と云—と云—と云—と云—と云—と云—
自立鍵—と云—と云—と云—と云—と云—と云—

おむ向塚序

やあ—と云—と云—と云—と云—と云—と云—と云—
の後よハサをたはまの句を石に彫不朽のあむ向塚と
築—と云—と云—と云—と云—と云—と云—と云—
海すま塚—と云—と云—と云—と云—と云—と云—と云—
とも只鏡と蟻の穴を築—と云—と云—と云—と云—
と云—と云—と云—と云—と云—と云—と云—と云—
との志あ—と云—と云—と云—と云—と云—と云—と云—

あのおつらうとて怪しくいふれ謝れぬ速き人として社中
皆よきと思ふよ。其の怪あつて座を其の位にすはむと
よ。我曹の怪しむるうらやまを合ふてあはれむと
とていふるもあつていふるもあつていふるもあつて
宝生院の怪あつていふるもあつていふるもあつて
の怪あつていふるもあつていふるもあつていふるも
いふるもあつていふるもあつていふるもあつていふるも
清白も身の後まはらせしむるもあつていふるもあつて
とて早計と世を誇りしむるもあつていふるもあつて
荒れつたまはれ自らいふるもあつていふるもあつて
の事と好らむとていふるもあつていふるもあつていふるも
あつていふるもあつていふるもあつていふるもあつて
風箱よ心ある人の誰うらやまをいふるもあつていふるも
草生とていふるもあつていふるもあつていふるもあつて
あつていふるもあつていふるもあつていふるもあつて

我とこの塚の掃除やまの事

節分日記

わうこつこつ鐘の聲とらふ者ありとて怪しく思ふ速き人
を其の位にすはむとよ。其の怪あつて座を其の位にすはむと
よ。我曹の怪しむるうらやまを合ふてあはれむと
とていふるもあつていふるもあつていふるもあつて
宝生院の怪あつていふるもあつていふるもあつて
の怪あつていふるもあつていふるもあつていふるも
いふるもあつていふるもあつていふるもあつていふるも
清白も身の後まはらせしむるもあつていふるもあつて
とて早計と世を誇りしむるもあつていふるもあつて
荒れつたまはれ自らいふるもあつていふるもあつて
の事と好らむとていふるもあつていふるもあつていふるも
あつていふるもあつていふるもあつていふるもあつて
風箱よ心ある人の誰うらやまをいふるもあつていふるも
草生とていふるもあつていふるもあつていふるもあつて
あつていふるもあつていふるもあつていふるもあつて

のきりかまはむらさき我にも年月と名のりく二句
 の又と唱へまゝうつくしくあらしは畏におきて遊
 ちり傷の井は呼に隠ひりう豆の香にさへ入らり
 終やうそせさへさへはれとさるのきりかまあうそ
 老のきりかまうしてあつ編の日くまはれくまの畏は
 目くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 の名をとまはれと酒のきりかまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 とち思へるよあまの酒のきりかまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 初いよしてあつ編の日くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 詠よりのあつ編の日くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 春のあつ編の日くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は

樂音路辞

晋路ハ竹内其ハ男以入ニ四ガウラマの
 正月のあつ編の日くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 それとあつ編の日くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 門人として

不佞少年のけさう俳諧を好む今老境もいへ病は
 やうとそを幽居の友とすれと何あつ編の日くまはれくまの畏は
 ともさるのあつ編の日くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 敲推を同寄もあれと師才に似ると慙いへるまの
 落安を告ぐ固く辞へあつ編の日くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 始て一人の門人を約せしむるも名をも晋路と按く
 け牙子年ニ草火燧子春とくく氣を咽きまゝ
 けさうのあつ編の日くまはれくまのあつ編の日くまはれくまの畏は
 の花よつとよも起さう小法師ハ月と床女我のふある

うもさるる時よ其れしつらへ一字の同とある我
物らとそ方をも海切定上の門弁しつぬの人々も其
家辞せしめて約をなすけ申へりあれとも家あり
先より其のあり故人らにや和親に候なりと況や
俳諧も狂言もや只法式よく習ふ一一其れともそは
定まると法式のあつらふも其れ一一法とて其理非の
穿鑿也一一天下のらんまうして其人の志をもその
とに秘する法なきも其れあはれ世に秘するは
さるらむもや物も月輪の如くあり感て其を其の
物ありまらざる當分の如くして我智明くする所不
とと知く其理なきは其れ其の只其の
よ止りく此の働をたかしく一理とあつたる其れは
おも形明くあり候一一其れ一一東西を指す人の
たしと詩文をまこととす人の秘するは其れ
一ツもあ一一其れもよらりしは其れと只其の才の
あつたあつて其れを別な秘すると貴まむ世に秘する
傳授しつらぬのにな世の者れ其れ其れ其れ其れ
よせぬと秘するは其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
よ倫也常ハおし候あり狐狸の如く其れ其れ其れ
俳諧も混まらるるは其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ
隠士あり

寄末更升歌
未更もあ〜末更齋のあ〜こころは物ら

うらや花よさうきまのりもさうさなを飾く月とを
く秋のおのさうさう目もおのさうさうの公も持乃
たさるをせにらよ者もあはれ殿の如くはら
しく輝のさうさうあつさうさうの常は笑さう
茶清のさ葉のたさう酒に者のさうさうのおも人
まはのさうさうさうさうさうさうさうさうさう
家ありあまさうさうさうさうさうさうさうさう
あふ

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

冬二文字賦

秋の降程物の思ふさうさうさうさうさうさうさう
さうさうのさうさうさうさうさうさうさうさう
まはさうさうさうさうさうさうさうさうさう
と名のさう一人の面もさう頂さうさうさうさう
と稱さうさうさうさうさうさうさうさうさう
進さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
の内はさうさうさうさうさうさうさうさうさう
云我もさうさうさうさうさうさうさうさうさう
御さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
御さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
せさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
はらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
のありさうさうさうさうさうさうさうさうさう

いづれあつてさうしたま威を借れどもさあ月よは護尾
の縄とくもられ一りさくま人の他々の坊は僕とく
故に運る怪の町を瓜期とて孫子孫とてのそ
こは一室多士とておるに並ひて夏の吉兆とてさうい
つせ一いぬやういへば縁にのみ彌らさくさ狸の
蝦蟆とありて余と法一妖怪らまよ一いさあもあ
ゆり一條幸の御町に怪しき毒と合を法おま占
りせけさまなれさく踊りおし不祥して坊らぬ
へりせ一山姥のこむれりりの瓜畑とて故人の病
まもつて法一さう一あらのつてこの糟まつけさ
と讀るる奇のさうさうりさあよ一いさくやうささ
秋あまの孫子孫とてさういへば縁にのみ彌らさくさ狸の
の村の瓜畑一おの果もさういへば縁にのみ彌らさくさ狸の
るおもさく一さくさくさく一世にさうさくさくさく
うりありとて平家のさ遣を似せさるやさく一只にさ
おと省る一味寄るまゆり味いさうりて寺に燈焼
の佐名とてにさくさくさくさく果一なるは
今のおもも掃さくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
何れとて昇の果あさくさく不用の字いさくさくさく
うらあひ味寄る一さくさくさくさくさくさくさくさく
とあや果あさくさくさくさくさくさくさくさくさく
と下あさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さ丹う一さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

風月堂を訪りてしるしをのけ家よか強きなり
一軸をそとく感あるの餘り紙をよと請く一句ととむ

まの紙をよと請くはそとく感あるの餘り紙をよと請く一句ととむ

六林いさく風月堂ハ屋府本所書林あり此書ハ昔意を
け紙の比よりうそとすく一句と請るハ古蹟あり今此ハ横書

書林風月堂
まの紙をよと請くはそとく感あるの餘り紙をよと請く一句ととむ

横九寸五分斗一尺一寸五分斗
今横物の一軸とす
是貞享四年丁卯冬のものあり今
天明八年戊申に至り百二年あり
夕道ハ今の風月堂孫ゆつる後受
てあり母某の継者なり

狂歌文

人の心をそとくして指さる一軸をのけけし上よか承りけ
去添くありそとくけするハ余意をよと請るまの紙をよと請
くまの紙のまの紙も捨く久しそとく承りけハ
我も母よしり今ハけ侍よりも方ある心ありと
あやむしり思あつしりも承りけれある内よ侍のまの紙
はさるあつてよみける

金園うるふあつしりも承りけ
そ杖の戸棚乃餅や捜さむ

りともくそとくしりも承りけ

更幽亭記

いさくつづの山里に代り草を幽亭く家ありしに少陸

鍾馗と我翁のふれと鬼一口よりいふと鬼は〜
はけ一巻をたくりよ家も輪の底も何れを井枯れよ
ふ〜〜の奇なる能者あるう形舞舞の老匠感嘆
の餘り戯れ〜叫びよよ〜〜

全賦

舞舞の老翁の志年の一巻とありは俳諧よれよ
ふ〜〜名と不月と新し〜より大邦も祿と地と
さ〜り物のや〜〜と濁り〜富〜も清く
ア〜〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
乃魚と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
世〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜又世の

世話にりよ月おき全のあり〜みよ〜や〜
市中の舞舞の〜〜ある店生〜より〜巨
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜と又塵俗の世中〜〜〜〜〜
夕顔の地紋をありけ〜〜〜〜
〜心人の〜〜〜〜〜
〜自奥強懸〜〜後の今〜
〜と〜〜〜〜〜
叶の〜〜〜の〜〜
と煮るれ外あり〜
〜と煮る〜〜七人の用とあ〜

程棚のあしりくろくしてきくくおほきめたりん
まうふ妖物の出るまあしくさうらきれ物さうりくろく
くくく人の清くしきりけ亭より一章の文を後きく
例の戯えとまに似てもあせのうがしあしりくろく
さる百話の内りくろく究くは程舌の智もあしり
了

程依を洗耳亭

くくくく程あるまのふ余さうりくろく依をの甲に世
あしりくろく水鏡塚ありさしりくろく万は甚そのまあしり
あしり其句を強し一帖とさしりくろく地とさしりくろくあしり
くくくくい塚と墓より申すは程一人とさしりくろく
くハ誰と申し甲にくくくく強士吹くまりくろく一
みきくくくあしりくろく生涯風航子持くくく一丙申の
冬享年古稀にけりくろく活し辛くあ其のまあしり
孝子洗耳亭のあしり遠近程録の挽詞とくく
く世に一帖と遺さしりくろく予は小亭と清りの暖乎
我がくろく不才の標標くハ程老朽く花とさしり
あしりあしり聯の上のまも綴りくろくあしりくろくは
求あしり固く辞しくろくまもくろくまもくろく
りまもくろく何れもくろくまもくろくまもくろく
且吊い且ハあしりくろくまもくろくまもくろく高甲の教は曰
はきくくまもくろくまもくろくまもくろく
あしりくろくまもくろくまもくろく

さる蘇峰と存性をかたり西の角かや伊勢方より
近江の山へきて嶺をうつり越え其遠くは又ちかたは
あふき福子存風とらるるこころいかに下りてこれ
と風塵の喧しきうらやま豊名書れ月と舞るあり
四射の佳歌りいづれすましく何を揚てらけ名とま
せんされぬましく舞長時をいのかさる明秋に編み
最に宿一あふきまきい海と録只ま月子のこころ
遠るましくれは又一字と流すお名入といふと出る
こころぬましくいふまをまき送るこころは子に兼つ
へし是をいづれに字よまき心張あきおと惜むら也
所謂東坡の真一と重今をその隣ましくいふあり
こころぬましくいふまをまき送るこころは子に兼つ

山本旦の口号

舞津のくくかくうく樓心るあり年ぬく
いづれまき人の同らしきりよる縁縣のまき人の
むつうまきまきくハあるこころあはれこころ後いふ
よまきくまきまき

口号して死後といひ一四十七よりあ
つきくまきまき面目も形

お歌 并引

金井林氏桂五子の存子一株のおありけおよより我
よ一語と求らるるもけおよいづれまきまき母のいづれ

ありて始て極むる年すといふ一少松のそ人
 とて子つゝうまゝ業をまゝとて置くに
 くよへく新ハ由も清く入く今もあつたうとてそ
 ありて柱子のまゝもいねもいあゝとてそ
 してかく孝懐よりそまゝ及つるまじさわと少女の
 ありとてまゝもまゝもまゝも曲よりすといふ
 を四句いゝく能名の詞とて自らまゝとて
 して自らまゝとてまゝもまゝもまゝも曲の
 ありてはまゝとてのまゝもまゝもまゝも
 あり

ありてまゝとて
 ありてまゝとて

ありてまゝとて
 ありてまゝとて

ありてまゝとて

ありてまゝとて

補逸

布袋屋風客句集序

風雅と云く西東するもの布袋屋と訪はるるに
 訪へい句れあはるる形一旬あれと記せしむる一
 記する者三百全吟うく一袖の端りさるる一
 年の文懐をさきあらう一丙丁と延まて池魚の年
 け舟子よ及ぶ年未の長をい流うく一何の鳥かき
 きんぬ惜心一恨心一あう一海く梅一程きいん
 よ記するさきい出くさうく一のく一帖と起り
 さるも其かたをい一の十に一くくわうく
 されともあう一の年らあう甚老に徳りやうに隣
 ありてさきよりあう一節はありあう又梅もえう
 四十一 ちう後下廿三

序と清はるる一うく一うく一うく一うく一うく一
 燈けい後子生し歳必茶一うく一役融をあらうこれ
 より句をさきい一うく一わのまを焼くあうい
 何の梅えうの寒をあらうのうく一も今十一年のまを焼く
 後うく一うく一うく一うく一

花のやういさういさういさういさういさうい

昭和四年庚寅に集る古稀翁二年のあせり翁乃
 後を記しるもの

早稲田大学図書館

011688991023